

「誇り」を失わないために

(「テサロニケ二・一〜八」)

以下はSNSでお付き合ひのあるある牧師のつぶやき。「逆に思うのは自慢でも自己宣伝でも、そういうのを全くしない牧師のほうが疑わしいんだよね。付き人でもいるわけ。だからか宣伝してくれるまで、待つてるわけ。おかしいでしょう。(以下略)「鋭い指摘である。確かに「福音を語れ、自分ではなく」とはよく言われるところだが、もし福音と自己が強い同一性を持つにいたったなら「福音を語る」とと「自分を語る」ことは不可分になるはずだ。実際使徒パウロはその代表格。何といつても「もはや我生くるにあらず、(ガラテヤ二・二〇)」と言っているのだから。今朝の箇所は恐らく他者から受けていただろう非難に対するパウロの反駁だが、そこから伝道者のあり方について三つ学びたい。

一、苦闘の中でも大胆に

二節においてパウロはテサロニケのキリスト者たちに自らの伝道を思い起こさせるように語っているのだが、かの地でのパウロの伝道態度は全

く持つて大胆なものであった。使徒行伝の助けを借りるとこの大変さがよくわかる。神の幻によってマケドニアに着き、ピリピで伝道を始めたパウロ一行を待つていたのは一日十万倍の教会成長ではなく、不当な拷問であった。悪霊追いが契機となり、彼らは不当に拘留され、鞭打たれたのだ。しかしどんな苦しみを受けてもパウロの大胆な伝道は全く変わらなかった。テサロニケでも会堂を見つかるやそこに入つて、大胆に「イエスこそキリストなのです(使徒一七・三)」と福音を語つたのである。そしてテサロニケを逃げ出さずにおれなくつても、彼はこの真正直な福音提示を変へることはなかったのである。

二、媚びず、へつらわず、おもねらず

続く三節から五節にはパウロが宣教に際して大切にしていたことが書かれているのだが、要は人に媚びず、へつらわず、おもねらずということである。ある学者たちはこの背景には当時ギリシャ・ローマ世界にいた遍歴の職業的宗教家の姿があると主張する。彼らにとつて宗教は「飯のタネ」だからどうしても「お客様は神様」的な発想になりがちだ。また耳を傾ける方も、耳障りなものより「ラブ・アンド・ピース」的なものがお好みだから、それを語れ

ば「ウイン・ウイン」。その何が悪いと聞き直る教師がいたというのだ。パウロは自らをそういつた人々と一緒にしてくれるなと言う。なぜだろう。それは彼の神の負託を受けた真理の伝道者としての矜持に反するからだ。こうした「一徹さ」は大切である。それは「いま恋をあさつたなら わたしの詩は はなやかに見えあがるだろう しかしながら わたしの詩のいのちはかれてしまつたらう」と歌つたかの八木重吉と軌を一にするものである。

三、ただ神の喜びのために

こう聞くとパウロの生き方は孤高で人を寄せ付けないように見えるのだが、それは大間違いだ。というのも彼は人にこびないだけではなく、自分にもこだわらなかつたからだ。そのことがよく分かるのが六節である。そこには「キリストの使徒たちとして権威を主張することもできたのですが、」とある。これはパウロが自らが霊的権威を与えられていたことを認めている証左であると考えてよい。だが彼はそうした権威ある姿にこだわることはなかつた。むしろ母がその子どもたちのためにあえて赤ちゃん言葉で話すように、同じところに降りて、懇切丁寧に教えた。まさに「やつてみせ、言つて聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば人は動かじ(山本五

十六)」の世界だ。しかしなぜ彼がそこまでして自分を捨てて同じ目線での伝道ができたのかといえは、彼が究極の目的を知つていたからである。それは神の栄光に他ならない。神の栄光、神の喜びを最優先にする時、私たちの内にはへつらいや阿りとは異なる、真の奉仕が実現するのだ。

* * *

「苦闘の中でも大胆に、媚びず、へつらわず、ひたすら神の喜びに生きる」このパウロの、そしてイエス・キリストにも見られる生は美しいが辛いことも多いだろうことは容易に想像がつく。人は誰もどこかでちやほやされたり、「いいね」がほしい生き物なのだ。だがかの使徒はぶれなかつた。なぜだろうか。その鍵こそ五節後半の「神がそのことの証人です」である。類似的表現はローマ一・九、コロシ一・二三、ピリピ一・八などにあり、珍しいものではないがここの書き方は独創的だと思う。原文はたった二語。「神・証人」これだけだ。独白、いや祈りにも聞こえる表現だ。矜持ある生を貫徹することは美しくも苦しいわざであり、私たちの力だけでは不可能だ。だが祈りがあれば話は別。真実に語つてなお解つてもらえないと涙を流すその日には、ぜひ声に出して祈つてほしい。「神は証人である、アーメン」と。